

「役所の想定を遙かに超えてしまうとき」

宮袋季美さんの話を聞いて

古瀬 敏（静岡文化芸術大学名誉教授）

富山方式の一つです、といいつつ、実は典型とは言えない。
さまざまな形を組み合わせている「ふらっと」。
利用する人が求めていることを実現しようとするれば、役所の想定を遙かに超えてしまう。
そこで、役所の言うことに合わせるか、それとも、その線引きを気にせず越境するか。

富山方式は、そもそも線引きを超えるのを気にしないということだったのだと思うが、「ふらっと」はそれと比べても枠組みを気にしないという点では群を抜いているように見える。

利用者と呼ぶか、お客さんと呼ぶか、いずれにせよ、ふつうはサービス提供側が上にいるのを、ひっくり返して、求めに応じて対応するのが第一、という発想。これは福祉に抜きがたく染みついている「してあげる、与える」というスタンスを突き崩したものであろう。

認めてもらえるかどうかわからない、認めてもらえないと費用がカバーされない。それを気にしないで、突進してしまう。
これは他ではなかなかできないことだ。

必要ならば対応する、というのを大原則にすれば考える前に行動が始まる。
現実にはなかなかできないことだ。
それが、突破する原動力なのだろう。